

芥川龍之介「西方の人」注解(三)

R. Akutagawa's "SAIHŌ NO HITO" Explanatory Notes (III)

吉田孝次郎
中野恵海

15 女 人

①大勢の女人たちはクリストを愛した。就中マグダラのマリアなどは一度彼に会つた為七つの悪鬼に攻められるのを忘れ、彼女の職業を超越した詩的恋愛さへ感じ出した。クリストの命の終つた後、彼女のまつ先に彼を見たのはかう云ふ恋愛の力である。クリストも亦大勢の女人たちを、——就中マグダラのマリアを愛した。彼等の詩的恋愛は未だに燕子花のやうに匂やかである。クリストは度たび彼女を見ることに彼の寂しさを慰めたであらう。後代は、——或は後代の男子たちは彼等の詩的恋愛に冷淡だった。(尤も芸術的テーマ以外には)しかし後代の女人たちはいつもこのマリアを嫉妬してゐた。
「なぜクリスト様は誰よりも先にお母さんのマリア様に再生をお示しにならなかつたのかしら？」
それは彼女等の洩らして来た、最も偽善的な歎息だった。

(注)

①大勢の女人たち アッシシのフランチェスコ、フランシア・ドゥサル、クララ、フランソアズ・ド・シアンタル、ゼベダイの妻サロメ、クーザの妻ヨハンナ、マグダラのマリアその他。

②七つの悪鬼 「一週の首の日の払暁、イエス甦へり先づマグダラのマリヤに現れたまふ、前にイエスが七つの悪鬼を逐ひいだし給ひし女なり」(マルコ伝、十六章ノ九)

「また前に悪しき靈を逐ひ出され、病を医されなどせし女たち、即ち七つの悪鬼のいでしマグダラと呼ばれるマリヤ」(ルカ伝、八章ノ二)。ルナンの「イエス伝」では神経症であらう、としている。

③詩的恋愛 至高純粹な恋。プラトニック・ラブ。

④彼女のまつ先に…… 「イエス『マリヤよ』と言ひ給ふ。マリヤ振反りて『ラボニ』(訳けば、師よ)と言ふ。」(ヨハネ伝・第二〇章ノ十六) ルナン「イエス伝」(第二十六章・墓のイエス)には「イエス伝は、歴史家によって、イエスの最後の息とともに終るのであ

る。しかし……我々がかう言はう、そのをり、マグダラのマリヤの強い想像力が、主役を演じた、と。愛の崇高な能力、幻想におそはれた女の愛情が、復活した神を世界に与へるその聖い瞬間とある。

⑤ 未だに燕子花のやうに 「未だに」というのは、「今もって」の意であり、燕子花は純粹さや、清楚なことの比喩であろう。燕子花は泥中に咲く花であり、仏教で言う泥中の白蓮華を想わせる。

⑥ 彼の寂しさ 例によって、天才のあじわう孤独感である。

⑦ 冷淡だった 重きを置かなかつたの意。

⑧ 芸術的 theme 絵画や文学上の theme。

(解)

クリストがやさしくした大勢の女人達の中で、マグダラのマリヤとの関係はまさしく詩的恋愛であった。それはつややかで美しく今もって我々の胸を撲つ。後代は、ことに男性はこんなプラトニック・ラブに重きを置かないが、女人達はひとしくそれに嫉妬を感じている。

「女人」と題して、芥川は、クリストをめぐつての、一般女人の、露わに出さないでいる性と、その妬心を探り上げたものと解される。

16 奇蹟

クリストは時々奇蹟を行った。が、それは彼自身には一つの比喩を作るよりも容易だった。彼はその為にも、奇蹟に対する嫌悪の情を抱い

てゐた。その為にも——クリストの使命を感じてゐたのは彼の道を教へることだった。彼の奇蹟を行ふことは後代にルツオの叫び立つた通り、彼の道を教へるのには不便を与へるのに違ひなかつた。しかし彼の「小羊たち」はいつも奇蹟を望んでゐた。クリストも亦三度に一度はこの願に從はずにはゐられなかつた。彼の人間的な、余りに人間的な性格はかう云ふ一面にも露はれてゐる。が、クリストは奇蹟を行ふ度に必ず責任を回避してゐた。

⑥「お前の信仰はお前を癒した。」

しかしそれは同時に又科学的真理にも違ひなかつた。クリストは又或時はやむを得ず奇蹟を行つた為、——或長病に苦しんだ女の彼の衣にさはつた為、彼の力の脱けるのを感じた。彼の奇蹟を行ふことにいつも多少ためらつたのはかう云ふ実感にも明らかである。クリストは後代のクリスト教徒は勿論、彼の十二人の弟子たちよりもはるかに鋭い理智主義者だった。

(注)

① 比喩 物事の説明に、これと相類似したものをかりて來ることであり、イエスの言説に巧みな比喩が多い。

② その為にも 「その為」というのは、クリストにとって奇蹟を行う事が容易であり過ぎる事、であり、「にも」というのは元來「理智主義」であるところから嫌悪の情を抱き勝ちであつたがその上との意である。奇蹟などは、第一やさしすぎる事だし、しかも大衆からむやみに驚ろかれる事などが心外であつた、位の意味であらう。

③使命 課せられた任務、天職をいう訳でこの場合、たやすい奇蹟に對してであるから、容易でない天職の意である。

④ルッソ *Jean Jacques Rousseau* (一七二一〜七八) フランスの思想家、作家。ジュネーヴ生れ。「人間不平等起原論」「社会契約説」などで民主主義理論を唱えて大革命の先驅をなすと共に「新エロイズ」などで情熱の解放を謳って浪漫主義の父と呼ばれた。

また「エミール」では一種の性善説「自然に還れ」に基づく教育論を述べ、第四編にはその宗教観が見られるが、その中に「……私自身としては神を非常に信じているので、あまりにも神にふさわしからぬ数多の奇蹟を信することはできない。」とある。

⑤不便を与へる 奇蹟をむやみに歓迎してキリストの眞精神を教える上から外れる、という風な不都合や迷惑を与える。

⑥小羊たち キリストが導びこうとする人達を指す。

⑦余りに人間的な性格 やさしく、弱い性質、という程の意である。

⑧お前の信仰はお前を癒した 「マタイ伝」第九章ノ二十二に「イエスふりかへり、女を見て言ひたまふ『娘よ、心安かれ、汝の信仰なんちを救へり』女この時より救はれたり。」とある。この言葉を責任回避の表現ととつたのが芥川である。

⑨彼の衣にさはつた為 「マルコ伝」第五章ノ二十五より三十。十二年間も病気で苦しんでいた女が群衆にまぎれこんでイエスにさわるとすぐに治り、「イエス直ちに能力の己より出でたるを自ら知り、群衆の中にて、振反り言ひたまふ『誰が我の衣に触りしぞ』」とある。

る。

⑩かう云ふ実感 前文の「彼の力の脱けるのを感じた」を指す。キリストを襲う脱力感についての内面的解釈として、この場合長病の女のくるしみを分担した、という風にも解される。それを、奇蹟を行う事に対する嫌悪の情とかためらひのせいにしたのは芥川の解釈である。

⑪十二人の弟子 「マタイ伝」第一〇章二〜四「十二使徒の名は左のごとし。先づペテロといふシモン及びその兄弟ヨハネ、ピリポ及びバルトロマイ、トマス及び取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブ及びタダイ、熱心党のシモン及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを売りし者なり。」とある。

⑫理智主義者 奇蹟によりかからない精神を意味するものと解される。最後に虚脱感のあることをまで見抜いている事までふくめて、理智主義とよんだものであろう。

(解)

奇蹟を行い得る能力に誇る、などという方向に自分を迷ひ込ませず、信ずる者は自身を救い得るとしたイエスを「科学的眞理」の掌握者とし、その自己の活動のエネルギーが奇蹟を行なうことでそがれるのをおそれた彼の精神を鋭い理智主義に結びつけたところにこの章の主旨があろう。

クリストの母、美しいマリヤはクリストには必しも母ではなかつた。彼の最も愛したものは彼の道に従ふものだつた。クリストは又情勢に燃え立つたまま、大勢の人々の集つた前に大膽にもかう云ふ彼の気もちを言ひ放すことさへ憚らなかつた。マリヤは定めし戸の外に彼の言葉を聞きながら、悄然と立つてゐたことであらう。我々は我々自身の中にマリヤの苦しみを感じてゐる。たとひ我々自身の中にクリストの情熱を感じてゐるとしても、——しかしクリスト自身も亦時々はマリヤを憐んだであらう。かがやかしい天国の門を見ずにありのままのイエルサレムを眺めた時には……………

(注)

- ①美しい 後代の絵画などはすべてマリヤは聖母として、美しく、やさしく、崇高にえがかれてゐる。芥川はそれにならつた態にして「美しいマリヤ」と使つたのであるが、ここでは、世俗的な道徳や、移序や、調和とかへの従順な生き方に徹したマリヤの生活態度に対する芥川の評価をもこめたものと考えられてよからう。芥川には「守らんとするもの」を否定しきれない矛盾があつたことが思われる。
- ②母ではなかつた 母と子という恩愛の絆の上には立っていないなかつた。

- ③かう云ふ彼の気もちを…………… マタイ伝・第十二章ノ四八・四九・五〇に「イエス告げし者に答へて言ひたまふ『わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ』斯て手をのべ弟子たちを指して言ひたまふ『視

よ、これは我が母、わが兄弟なり。誰にても天にいます我が父の御意をおこなふ者は、即ち我が兄弟、わが姉妹、わが母なり」とある。

④悄然 元氣のないさま。うれえるさま。

⑤クリストの情熱 永遠に超えんとする者の持つ情熱、絶対者への情熱。

⑥憐んだであらう マリヤの身にもなつてみる、意である。

⑦イエルサレム ユダヤ王国の首都。旧約聖書のほとんどがこの地で書かれた。イエスの宣教の或る部分、その死、復活、昇天の舞台。

(解)

この章の主旨は「背徳者」と題したところにあり、その「背徳者」の意味は、「永遠に超えんとする者」は肉親の母に対して、相対的、地上的の意味では背徳者とあえてならざるを得なかつた、という風に見える。

人の子イエスに立ち返つて現実を直視した場合、子に叛かれた母の身になつて、切ない同情を覚えた事も何度かあつたであろう。直接関係はないが、アンドレ・ジッドに「背徳者」という作品があり、愛妻の献身的な看護で回復した主人公が、よみがえつた己れの生命を享楽する為その愛妻まで犠牲にする悲劇が書かれてゐる。

クリスト教はクリスト自身も実行することの出来なかつた、逆説の多い、詩的宗教である。彼は彼の天才の為に人生さへ笑つて投げ棄ててしまつた。ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を発見したのは当り前である。彼の教へた所によれば、「ソロモンの榮華の極みの時にだにその装ひ」は風に吹かれる一本の百合の花に若かなかつた。彼の道は唯詩的に――あすの日を思ひ煩はずに生活しろと云ふことに存してゐる。何の為に？――それは勿論ユダヤ人たちの天国へはひる為に違ひなかつた。しかしあらゆる天国も流転せずにはあることは出来ない。石鹼の匂のする薔薇の花に満ちたクリスト教の天国はいつか空中に消えてしまつた。が、我々はその代りに幾つかの天国を造り出してゐる。クリストは我々に天国に対する愉悅を呼び起した第一人だつた。更に又彼の逆説は後代に無数の神学者や神秘主義者を生じてゐる。彼等の議論はクリストを茫然とさせずには措かなかつたであらう。しかし彼等の或者はクリストよりも更にクリスト教的である。クリストは兎に角我々に現世の向うにあるものを指し示した。我々はいつてもクリストの中に我々の求めてゐるものを、――我々を無限の道へ駆りやる喇叭の声を感ずるであらう。同時に又いつもクリストの中に我々を虐んでやまないものを――近代のやつと表現した世界苦を感じずにはゐられないであらう。

(注)

①逆説の多い パラドックスの意ではあるが、芥川は、イエスの言

う、赤ん坊でなければ天国に入ること許されないとか、明日を思ひ煩わずに現実生活をせよとか、という無理の多い説き方などを指しているのだと思われる。

②詩的宗教 「詩的」の語は前述の「15、女人」の章の「詩的恋愛」のところに通じるもので、このあとにつづく文章の「ロマン主義」に通うものである。即ち、純粹な、とか文学的とかの意である。

③ワイルド Oscar Wilde (一八五六一一九〇〇) 十九世紀末イギリスの耽美主義文学の代表作家。ペーターの影響を受け、宗教・道徳を否定、芸術を生活の基準となした。回想録「獄中記」小説「ドリアン・グレイの画像」戯曲「サロメ」童話集「幸福な王子」などがある。

④ロマン主義者の第一人 「ぼくはクリストのうちに、ただ最高のロマンチックな性格の種々の本質的要素を見るばかりでなく、同時にロマンチックな氣質に属するあらゆる偶発的な事柄、あえていえば気まぐれな我意をさえ見るからだ」(獄中記)

「第一人」の意は「最初の人」の意にもとれるが、ナンバーワン「最高の人」の意であらう。

⑤「ソロモンの……」 マタイ伝、第六章ノ二十九「然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき」。

⑥「あすの日を……」 同右、三十四「この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足

れり。」

⑦天国も流転…… 天国も恒久、永遠の存在ではない。「侏儒の言葉」の「星」の章に、「生死は運動の方則のもとに、絶えず循環しているのである。」とあり、又「しかし星も我我のように流転をけみ閱する」とある。

⑧石鹼の匂のする薔薇の花 「金色夜叉」の富山唯継が白羽二重のハンカチーフに滲ましたバイオレットの香水でもなければ、「三四郎」に出て来る美弥子のヘリオトロップの香りでもない。石鹼の匂いというのは、高貴なものに対する安物であり、それは人工的であり、洗濯したりした、薄手のものを思わせる。更に言えば「石鹼の匂いのする薔薇の花」とは「風に吹かれる一本の百合の花」に対するもので、安っぽい人工造花の薔薇の花の飾りを意味するものであらう。

⑨愉快 読みは「しょうこう」。驚ろいてほんやりするさま、であるが、ここでは「あこがれ」の意であらう。

⑩茫然と…… イエスの真意と余りにも違い過ぎて、の意であらう。

⑪彼等の或者 後代のクリスト達の中の或者者。

⑫クリストよりも更にクリスト教的 イエスよりも一層ひどく理想主義的、浪漫主義的で過激、過剰の状態になった、という意味であらう。

⑬喇叭の声 進め、進め、と我々を追いやる声の意。

⑭虐さいなんでやまないもの イエスの教えにしたがう者は苦しまずにお

れなくなる。呵責、煩悶、その他。

⑮世界苦 たとえばそれは、窄き門の前に立つ知識人の矛盾、分裂から来る、人生の苦悶、とか、近代知識人が現実を直視することでおちこんだ人生の無意味感とか虚無感など。

(解)

クリスト教は作者のクリスト自身が実行出来なかったほどの、甚だ無理の多い、人類の手に成る最高至純の宗教で、彼はその為に平気でこの人生を投げ棄てたのである。その熾烈なあこがれは、ワイルドの目には恐るべきロマン主義者と映った。どの様に棄てたかは「ソロモンの栄華の極み」と述べた時でさえ、その服装は野の風に吹かれる一本の百合の花に及ばない、と教えた事からでも解るではないか。彼の生き方は、詩的に生きよ、つまり、明日のことをよくよするな、神にまかせよ」ということにその精神がある。何の為か、それはユダヤ人達を天国に(詩的世界)に生まれさす為であった。然し、どんな天国も流転はまぬがれない。まして人工的な(安物の)造花で飾られた天国(つまり、人の子イエスが夢想した人工的なクリスト教の天国)は、シャボン玉の如く空中で消えてしまった。我々人類はその代り、あらゆる文化(芸術・哲学・宗教など)を通してパラダイスを造りあげている。

イエスは我々人類に、天国に対する激しい憧憬を呼び起こすことにかけては第一の人であった。その上、彼の逆説にわずらわされて数え切れない程の神学者や神秘主義者を生じ、枝葉末節に走る彼等の論議

にはイエスも茫然とさせられたらうし、行き過ぎて真意をあやまる者も出た。

イエスの作品であるところのキリスト教について述べるに右の通りであるが、作者本人のイエスは、我々に現世の向こうにあるものを指し示した。そして、我々はいつもキリストの言動の中に、我々の求めているものを、我々を果てなき道に奮いたたせる声を感じるであらう。が、また同時に我々をたえず悩ますもの、即ち近代人が当面し表現するに至った現実人生の無意味感とか虚無感をも感じないではないであらう。

右の解説文を通してうかがえるが如くこの章の主旨は、作者のイエスと、彼の作品であるキリスト教とを別にしたところにある。芥川には、イエスを大きく認め、その作品キリスト教は重んじないという態度があり、それがここに出てくる様に思われる。

19 ジャアナリスト

我々は唯我々自身に近いものの外は見ることが出来ない。少くとも我々に迫つて来るものは我々自身に近いものだけである。キリストはあらゆるジャアナリストのやうにこの事実を直覚してゐた。花嫁、葡萄園、驢馬、工人——彼の教へは目のあたりにあるものを一度も利用せずにはすまされたことはない。「善いサマリア人」や「放蕩息子の帰宅」はかう云ふ彼の詩の傑作である。抽象的な言葉ばかり使つてゐる後代

のキリスト教的ジャアナリスト——牧師たちは一度もこのキリストのジャアナリズムの効果を考へなかつたのであらう。彼は彼等に比べれば勿論、後代のキリストたちに比べても、決して遜色のあるジャアナリストではない。彼のジャアナリズムはその為^⑩に西方の古典と肩を並べてゐる。彼は実に古い炎に新しい薪を加へるジャアナリストだつた。

(注)

①花嫁 「マタイ伝」第二十五章ノ一「このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎へに出づる十人の處女に比ふべし」。ヨハネ黙示録第二十一章ノ二「我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。」
②葡萄園 マタイ伝・第二十一章ノ三三「また一つの譬を聴け、ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒樽を掘り、櫓を建て、農夫どもに貸して遠く旅立せり。」

③驢馬 ルカ伝・第十三章ノ十五「主こたへて言ひたまふ、『偽善者らよ、汝等のおの安息日には、己が牛または驢馬を小屋より解きいだし、水飼はんとて牽き往かぬか』」

④工人 ルカ伝・第十四章ノ二八「汝らの中たれか櫓を築かんと思はば、先づ坐して其の費をかぞへ、己が所有、竣工までに足るか否かを計らざらんや。」

⑤善いサマリア人 ルカ伝・第一〇章ノ三〇〜三五「イエス答へて言ひたまふ、或人エルサレムよりエリコに下るとき、強盜にあひし

が、強盗どもその衣を剥ぎ、傷を負はせ、半死半生にして棄て去りぬ。或る祭司たまたま此の途より下り、之を見てかなたを過ぎ往けり。又レビ人も此処にきたり、之を見て同じく彼方を過ぎ往けり。

然るに或るサマリヤ人。旅して其の許にきたり、之を見て憫み、近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ傷を包みて己が畜にのせ、旅舎に連れゆきて介抱し、あくる日デナリ二つを出し、主人に与えて『この人を介抱せよ。費もし増さば我が帰ってくる時に償はん』と云へり。サマリヤはパレスチナの中央部で孤立した丘の頂にある村。

⑥放蕩息子の帰宅 ルカ伝・第十四章ノ十一〜三二、放蕩して自分の貰った財産を異国で失った息子を「死にて復生き、失せて復得られた」ものとしてあたたかく迎えた話。

⑦詩 詩とは文学を意味するものであるが、ここでは前文の意を受けて、身近なもので人の心を感動させる作品、魂を感動させ納得させるに足る作品、の意であらう。

⑧彼等 牧師たち、を指す。

⑨クリストたち キリストの真精神を持っている者、聖霊の子（永遠に超えんとする者）

⑩西方の古典 旧約をはじめとする、ギリシヤ・ローマの詩、歴史、戯曲、哲学など。なお、このルビによって本書を「さいほうのひと」とよむ。

⑪古い炎に新しい薪を加える 「古い炎」とは旧約など、古代からの理想を意味し「新しい薪……」は、現在の素材を加える事を意味するであらう。

(解)

この章の主旨は、イエス・キリストが、手近かの素材を以て人々を感動させる作品を創り上げる才能の所有者である、その面を強調する事であり、その意味をこめて、ジャナリストと題した。そして最後の一文では、作品をつくるに際しては Actuality (現実) を尊ぶ気持の現われと、古来からの理想を、生々しい素材を取り入れる事で新しくよみがえらせることに注意を寄せている。同時に、新約聖書は普通、ジャアナリズムの所産とはみとめられていないのであるが、敢えてそう断定しているようである。つまり新約をジャアナリズムの作品であると解し、型の如き古典とはみていないのである。又、芥川が文学に於て、現実尊重の一つの極北とも考えられ、懐疑の影もなかった志賀直哉や滝井孝作の作品にはげしい憧憬と敬意をもった事が連想される章でもある。

20 エ ホ バ

クリストの度たび説いたのは勿論天上の神である。一我々を造つたものは神ではない、神こそ我々の造つたものである。——かう云ふ唯物主義者クウルモンの言葉は我々の心を喜ばせるであらう。それは我々の腰に垂れた鎖を截りはなす言葉である。が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。のみならずこの新らしい鎖も古い鎖

よりも強いかも知れない。神は大きい雲の中から細かい神経系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる。⑧
 クリストは勿論目のあたりに度たびこの神を見たであらう。⑨（神に会はなかつたクリストの悪魔に会つたことは考へられない。）彼の神も亦あらゆる神のやうに社会的色彩の強いものである。しかし兎に角我々と共に生まれた「主なる神」だつたのに違ひない。クリストはこの神の為に——詩的正義の為に戦ひつづけた。あらゆる彼の逆説はそこに源を發してゐる。後代の神学はそれ等の逆説を最も詩の外に解釈しようとした。それから——誰も読んだことのない、退屈な無数の本を残した。⑩
 ヴォルテエルは今日では滑稽なほど「神学」の神を殺す為に彼の剣を揮つてゐる。しかし「主なる神」は死ななかつた。同時に又クリストも死ななかつた。神はコンクリートの壁に苔の生える限り、いつも我々の上に臨んでゐるであらう。⑪
 ダンテはフランチェスカを地獄に墮した。が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。一度でも悔い改めたものは——美しい一瞬間を持つたものはいつても「限りなき命」に入つてゐる。感傷主義の神と呼ばれ易いのも恐らくはかう云ふ事実の為であらう。

(注)

①エホバ Jehovah イスラエル人が崇拜した神の名。ヘブライ語で旧約聖書にあり、万物の創造主で、宇宙の統治者。上帝。天帝。ヤーウエ Yahveh.

②天上の神 ジャナリズムと題する前章では「加えられる新しい

薪」即ちイエスの作品新約聖書の方にポイントが、そして「エホバ」と題する此の章は「古い炎」旧約の方にそれがある。エホバとは「大きい雲の中」の「天上の神」である。

③我々を造つた……。グールモンの『対話』に「神『人間よ、誰がお前を造つたのだ』人間『神よ、誰がお前を作つたのだ』」とある。

④グールモン Remy de Gourmont (一八五八—一九一五) フランス象徴派の文人。詩論のほか特色ある小説・劇・エピグラム(警句)を書いた。

⑤我々の心 知識人、近代人たる我々。

⑥腰に垂れた鎖 人間の心身を支配する神の律法を重んじた中世の思想。

⑦神経系統の中に下り出した 神とは我々の外に在って我々を支配するものでなく、寧ろ我々の神経系統に感じられる存在となり出した、の意。

⑧あらゆる名のもとに 何とかかんとか名を変えての意で、それ等の名とは、例えば、美の神、芸術の神、運命の神などを指すであらう。

⑨そこに位してゐる 神経系統ではなくて、大きい雲の中である。我々の外が、わである。

⑩神に会はなかつた…… 悪魔に会うという事は、神に会わないでは出来ない事だ。

⑪社会的色彩の強い 社会性時代性が強い、或は人間社会と強いつながりがある。

⑫我々と共に生まれた「主なる神」。「我々と共に生まれた」という語句は、神こそ我々の造つたものであるというグウルモンの言葉の如く、人間の製品という意があるう。「主なる神」とは旧約に出て来る、エホバを意味する言葉である。従つてこの神は前の語につづけると相対的な存在物から生れた絶対性を持った加工物の意と解される。

⑬詩的正義 ワイルドの言葉の借用か。「クリストの正義はすべて詩的正義だ。そして正義とはまさしく詩的正義であるべきだ」。(獄中記)そしてこれは、クリストの憧れ求めた絶対のものを意味する。

⑭そこに 相対的なものの中から絶対的な力を持ったものが出て来たということ、そこに、という意。

⑮詩 ここでは詩的態度(精神)という程の意。

⑯ヴォルテール Voltaire (一六九四—一七七八) フランスの啓蒙思想家。文学者。「哲学書簡」「カンディード」などでクリスト教を批判している。

⑰クリストも死ななかつた 後代に、クリスト達があとをたたなかつた。クリスト達とは、真のクリスト教精神をもつた者、永遠に超えんとする者、聖霊をもって生きる人達を意味する。

⑱コンクリートの壁に苔の生える限り (物質) 文明が移り変りの、消長を繰り返す限り、即ち(物質文明が)不朽のものにならない限り(精神文明は絶えないであろう)永遠絶対の神を求めるであろうの意。

⑲ダンテ フィレンツェ生まれのイタリア最大の詩人(一二六五—一三二一)。永遠の女性ベアトリーチェを主題として「新生」「神曲」を書いた。

⑳フランチェスカ 「神曲」の地獄篇に出てくる女性で、姦通のため地獄におちた。

㉑炎の中から救つていた 作品の筋の上では必ずしも地獄から救い上げてはいないが、彼女の切々たる恋の真情を訴えられて感動に堪えず、その始終を聞くという一段があり、そこは作品中の絶唱と称されている。之を芥川は敢えて救いと解したのである。

㉒美しい一瞬間を持ったもの キリストの云う「悔い改め」を人間至情の美しい発露とし、フランチェスカの至情につないでいる。

(解)

この章の主旨を述べれば次の如くなるであろう。「エホバ」という神は、クリストの創り出した神である。つまりそれは相対的存在であるという事である。そして、クリストはそれを絶対的のものとして、その為に一生を捧げたのである、その為とは、詩的正義の為という意味であり、エホバの存在はクリストに於ては詩的正義の神の实在を意味する。

この事情の理解出来ない為に、後世、むづかしい論議や批難がある。が、然し、クリストの「主なる神」は生きている。クリストのエホバの神は、文明というものが時間に支配されて、朽ちてゆくものである限り、いつも吾々に君臨しているのである。何故生きるのである

か。それは譬えばこうであろう。ダンテはフランチエスカを地獄に落しながら、この女性を讃美している。つまり一度でも悔い改めるとい
う、美しい一瞬間を持ったものはいつも永遠の生命を得ている。だか
ら、キリストの「エホバ」の神が、感傷主義の神と呼ばれ易いのもこ
の為であろうと思われる。

この章は、キリストが「エホバ」に関して「古い炎に新しい薪を加
えるジャーナリスト」なる事を述べて、十九章を承けつぐ章であると
考えられる。

(吉田孝次郎・短大教授・国文学科)
中野恵海